

「被爆体験伝承者」委嘱までの経過（2023年度  
募集第12期 大石秀邦）

◆ マッチング理由 → 被爆体験証言者 梶矢さん、作家 原民喜、父（大石正文）の被爆体験の類似性

◆ 梶矢グループミーティング（2023年9月～）

第01回 9月7日 ・ 第02回 9月30日 ・ 第03回 10月15日  
第04回 11月19日 ・ 第05回 12月23日 ・ 第06回 1月27日  
第07回 2月10日 ・ 第08回 3月10日 ・ 第09回 4月21日  
第10回 6月2日 ・ 第11回 7月20日 ・ 第12回 8月18日 欠  
第13回 9月14日 ・ FW 10月14日 ・ 第14回 11月17日  
第15回 12月15日 ・ 第16回 2月22日 ・ 第17回 3月23日  
（予定）

◆ 講話原稿提出から認定及び委嘱までの経過

推進課	第1稿送信	2024年	3月23日	+	画像の使用申請
推進課	第1稿校正	2024年	3月29日		
推進課	第2稿送信	2024年	3月31日		
推進課	第2稿校正	2024年	4月8日		
推進課	第3稿送信	2024年	4月9日		
推進課	第3稿校正	2024年	4月23日		
推進課	第4稿送信	2024年	4月23日		
推進課	第4稿校正	2024年	5月8日		
推進課	第5稿送信	（推進課から啓発課へ転送）			
啓発課	第5稿校正	2024年	9月2日		
推進課	第6稿送信	（推進課から梶矢氏へ転送）			
梶矢氏	第6稿校正	2024年	9月13日		
推進課	最終稿送信	2024年	9月13日		
講話実習	第1回	2024年	10月8日		
講話実習	第2回	2024年	11月12日		

検定講話		2024年12月10日
推進課	伝承者認定	2025年1月10日
啓発課	伝承者委嘱	2025年2月1日
定時講話	1回目	2025年3月4日（11時30分から12時30分）
定時講話	2回目	2025年4月17日（14時30分から15時30分）予定

#### ◆ 原稿の作成

原稿の作成  
案作成

2023年10月から2024年3月初旬にかけて

視覚資料の作成

2023年10月から12月にかけて原案作成

画像提供申請先  
長崎大学

資料館・広島市公文書館・広島市中央図書館・中国新聞社・

#### ◆ 講話の構成（約10,442文字） 約50分

- ① 被爆の実相（3,435文字） 約15分 → 実相部分のボリュームが厚いとの指摘
- ② 梶矢文昭さんの被爆体験（5,434文字） 約30分 → 原民喜および父親を加えた被爆体験
- ③ ヒロシマをつなぐ（1,573文字） 約05分  
→ 梶矢さんの生き方・在り方、核兵器をめぐる現状、伝承者自身の思いや願い

#### ◆ 原稿作成にあたっての雑感

被爆の実相については、2023年9月頃には記述終了。平和資料館の「総合図録」及び広島市のホームページを基本にしつつ、B-29の気象観測機やエノラ・ゲイ号などの飛行ルート及び探照灯台の監視状況等については、広島原爆戦災誌から転載（出典等をメモしておく）。使用申請をする予定の画像をイメージしながら書き進める。核分裂のメカニズムや放射線量等、専門性が高いような表現は避けた方がよいとのアドバイス。一方で、核分裂によって生じた火球と太陽の比較、爆風の秒速と新幹線の秒速の比較、熱線の輻射熱と鉄の熔解温度など、イメージしやすい比較材料を意図的に盛り込む。あくまで小学校6年生を対象とする表現が基本。

梶矢さんの被爆体験については、小説「夏の花」の作者である原民喜や父親の避難ルートを重ねて、8月から10月にかけて現地フィールドワークを繰り返してイメージを膨らませた。

ミーティングを通じて印象的であったのは、被爆者に対する「風評被害」。被爆後、大朝に疎開された場面やお母さんの授業参観の際のエピソードなど。「熱線」「爆風」「放射線」そして「風評」を。

原稿は早めに平和推進課へ提出し、客観的な視点から担当者に校正をしてもらう。校正と

修正を重ねる過程においても、伝承者自身が伝えたいことを諦めないことも大切か？

梶矢さんになりきって記述する場面と伝承者の立場で記述する場面が混在してしまい、聴講者に伝わりにくい面がある。「向かいました」「じっと耐えていました」「～だったそうです」「～と当時を振り返って話されます」「～をしているそうです」。

原稿では、「難しい」用語や「音では判別しにくい」用語を使いがち。例えば、放射線を浴びた「土壌」（どじょう）は「つち」に、日清戦争を「契機」（けいき）としては「きっかけ」として、「バラック」は「小屋」、「焦土」と化すは「焼野原」と化す、「多様」な方法は「いろいろ」など、言い換えの工夫を。

平和推進課等からは、当時6歳の子供（梶矢さん）の心情を表現するには、具体的な場面や心理の描写が必要である。全体的にいろいろな話が散見しすぎ、また、用語も難解なので「小学校6年生を相手に話すことを想定して易しい表現を心掛けるべき」との指摘を度々受けた。